和歌山県白浜町に所在する京都大学瀬戸臨海実験所構内で枯死したカナリーヤシ
Phoenix canariensis Chaubaud withered in the campus of the Seto Marine Biological Laboratory, Kyoto University in Shirahama, Wakayama, Japan

久保田 信[1]・樫山嘉郎[2]・中西弘樹[3]　Shin Kubota[1], Yoshiro Kashiyama[2] & Hiroki Nakanishi[3]
[1] 京都大学フィールド科学教育研究センター瀬戸臨海実験所（〒649-2211 和歌山県西牟婁郡白浜町 459）
[2] 〒649-2101 和歌山県西牟婁郡上富田町岡 50
[3] 〒851-2130 長崎県西彼杵郡長与町まなび野 2 丁目 29-4 亜熱帯植物研究所

はじめに

和歌山県白浜町に所在する京都大学瀬戸臨海実験所構内（面積 40,630 m²）の植物相として、4 門 7 綱 109 科 278 属 340 種が記録されているが（樫山ほか, 2002）、この内でヤシ科 Palmae には、ビロウ *Livistona chinensis* (Jacq.) R. Br. ex Mart、カナリーヤシ（＝フェニックス）*Phoenix canariensis* Chaubaud、シンノウヤシ *P. roebelenii* O'Brien、ワシントンヤシ *Washingtonia filifera* (Linden & Andre) H. Wendl.、ココヤシ *Cocos nucifera* L. の 5 種が記されている。この内のカナリーヤシの多くが、近年、同時期に相次いで枯死したので報告し、その原因を推定する。

結果と考察

今回初めて京都大学瀬戸臨海実験所構内で成長中の 5 本のカナリーヤシが 2013 年にほぼ時を同じくして枯死した（図 1-7）。その内の瀬戸臨海実験所研究棟の北側に定植された 1 本を、毎日のように久保田信が研究室から観察したが、2013 年 11 月に完全に枯死した（図 1, A; 図 2）。それから半年後にその木の上部が傾き始め、それからの半年後には上部が自ら脱落した（図 3）。

このカナリーヤシが傾き始める頃からアコウ *Ficus superba* (Miq.) Miq. var. *japonica* Miq.（図 4）が幹上で次々と芽を吹き、それから約半年後には 3 本とも灌木位の大きさとなり、枯木の上で成長し続けている（図 4 上; 図 3 も参照）。

ここで、元実験所職員の樫山嘉郎によると、このような大形に成長したカナリーヤシなどは、番所山から構内に計 6 本がかつて定植され、瀬戸臨海実験所に技官として勤務を始めた 1962 年には樫山の身長位の高さがあった。これら 6 本の内の 2 本は、それぞれ現在の宿泊棟の南西隅に 1 本（図 1, B）とその宿泊棟と以前の水族館のほぼ中間地点に 1 本（図 1, C）あったが、両者とも 1983 年の研究棟と宿泊棟の改築の際に取り除かれた。

こうして 1962 年以降 51 年をかけて 2013 年まで成長していた 4 本の内、上記の 1 本（図 2）に加え、他の 2 本、即ち実験所宿泊棟のすぐ南側の 1 本（図 1, D; 図 5）（これに並ぶ 1 本のヤタイヤシ [アコウとマツバランが成長、マツバランは構内植物の新参] は枯死せず[図 1, E]）と楽学荘の西側の 1 本 [アコウ成長]（図 1, F; 図 6）も相次いで枯死した。

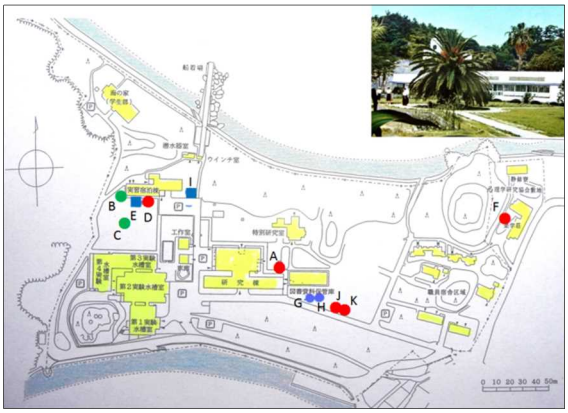

図 1.カナリーヤシ（●）とヤタイヤシ *Butia yatay* (Mart.) Becc.（■）（A–K）の計 11 本が定植された瀬戸臨海実験所構内（赤印は枯死、緑印は除去、青印は生存）。右上の挿図は 1960 年発行の「番所山植物園」の絵葉書を改写(中央が C 個体)。

図 2. 京都大学瀬戸臨海実験所研究棟の北側に定植されたカナリーヤシ（図 1, A）の枯死（2013 年 11 月 22 日に研究棟 2 階から撮影）。

樫山嘉郎によると、再び 1983 年にヤシ類の 2 度目の定植があり、計 5 本が（図 1 , G–K）なされた。それらの内､図書館の南側の 2 本のカナリーヤシ(図 1 , G, H）と宿泊棟東側の北浜へ続く小道に定植された 1 本のヤタイヤシ（図 1 , I）は、2015 年 9 月現在も生育中だが、図書館の南東側の 2 本のカナリーヤシは、2013 年に枯死した（図 1 , J, K; 図 7)。

図 3. 枯死から 1 年後のカナリーヤシ（図 2 と同個体）の上部が崩れた状態。

図 4. 枯死したカナリーヤシ上で（図 2, 3 と同個体）生育中の 3 本のアコウ（上）とその葉（下)。

図 5. 京都大学瀬戸臨海実験所宿泊棟の南側に定植されたカナリーヤシ（図 1, D）の枯死（2014 年 11 月 14 日撮影)。宿泊棟に沿ってその西側に並んで見える 1 本は枯死しなかったヤタイヤシ（図 1, E)。

図 6. 京都大学瀬戸臨海実験所楽学荘の西側に定植されたカナリーヤシ（図 1, F）の枯死（2014 年 11 月 15 日撮影)。

図 7. 京都大学瀬戸臨海実験所図書館南東側に 1983 年に定植された 2 本のカナリーヤシ（図 1, J, K）の枯死（2015 年 6 月 15 日撮影)。

以上のように、2 度の定植後に 2013 年まで成長していた計 7 本の内の 5 本のカナリーヤシ（図 1, A, D, F, J, K）の今回の枯死の原因は、アコウの着生によるものではなく、ヤシオオオサゾウムシ *Rhynchophorus ferrugineus*（昆虫類，鞘翅目）による食害だと推定できる。というのも、2014 年 11 月 25 日に枯れ落ちた 2 本の木（図 1, D, F; 図 5, 6）の葉柄基部の部分に直径 1 cm 前後の穴が多数開けられ、本種の幼虫・蛹・成虫が生息していたからである（図 8）。

ヤシオオオサゾウムシの成虫は大形で、体長 40 mm に達し、日本ではカナリーヤシを食害することで昨今よく知られるようになった（紀伊民報, 2009, 2015）。和歌山県下では 2007 年に田辺市稲成町でヤシオオオサゾウムシによる同様の枯死が確認されて以降、白浜町やすさみ町でも本種の食害による同様の枯死が相次いで記録されている（紀伊民報, 2011, 2013, 2015）。白浜町に所在する当実験所でも、上記のようにこの甲虫による枯死が連動して起こっていると推定され、今後の動向に注意が必要である。ヤシオオオサゾウムシは白浜の冬季の寒さでも死滅せず、越冬可能と推察されている（的場私信）。

図 8. 右から、ヤシオオオサゾウムシ成虫、成虫が抜け出た繭、蛹の入った繭（繭の約 3 分の 1 を除去）。

謝辞

構内でヤシオオオサゾウムシの幼虫・蛹・成虫を発見された和歌山県立自然博物館副館長の的場績氏に深謝致します。

引用文献

樫山嘉郎・久保田 信・白山義久・梅本信也. 2002. 瀬戸臨海実験所構内植物リスト(1962–2002). 瀬戸臨海実験所年報, 15: 30–37.
紀伊民報. 2009. 田辺市で大型ゾウムシ. 県全域に広がる可能性も. 20079 号.
紀伊民報. 2011. 外来ゾウムシ侵入. 白浜フェニックスが枯死. 20524 号.
紀伊民報. 2013. 外来ゾウムシ食害. ヤシの枯死相次ぐ. 21140 号.
紀伊民報. 2015. フェニックス 食害で枯死相次ぐ. 国道 42 号沿い 原因はゾウムシ. 21853 号.